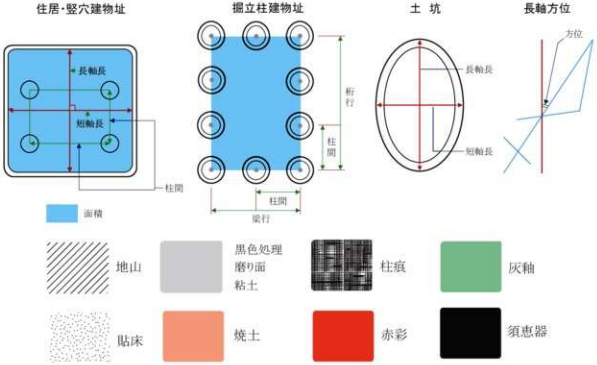
例　言

1.本書は、ルートインジャパン株式会社が行うホテル増築工事に伴う発掘調査報告書である。
2.調 査 原 因 者　　ルートインジャパン株式会社　代表取締役　永山泰樹
3.調 査 主 体 者　　佐久市教育委員会
4.遺跡名及び調査面積　　三千束遺跡群　市道遺跡Ⅵ(IM Ⅵ)　　560㎡
5.所 在 地　　佐久市三塚字市道 127-1、127-2
6.調査期間　　令和元年 12 月 2 日～令和 2 年 4 月 23 日 (現場発掘作業)
　　令和 2 年 4 月～令和 3 年 3 月 (報告書作成作業)
7.調 査 担 当 者　　冨沢一明
8.本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1.遺構の略記号は、住居址 (H)・掘立柱建物址 (F)・土坑 (D)・溝状遺構 (M) である。
2.挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3.遺構の標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4.土層の色調は、1988 年版『新版　標準土色帖』に基づいた。
5.遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。(　) は推定値、<　> は残存値である。
6.測量座標は世界測地系を用い、調査区グリットは公共座標の区割りに従い、間隔は 4 × 4 m に設定した。
7.遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。挿図中における網掛けは以下を示す。



目　次

例言・凡例
目次・調査体制

第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　第１節　調査の経緯
　第２節　調査日誌
　第３節　調査の概要
　第４節　基本層序

第Ⅱ章　遺構と遺物
　第１節　竪穴住居址
　第２節　掘立柱建物址
　第３節　土　坑
　第４節　溝状遺構
　第５節　ピット
　遺物観察表

第Ⅲ章　調査成果

　写真図版
　抄　録

遺跡遠景（南より）　奥に見える山並みは冠雪の浅間山

調査体制

令和元年度・令和２年度

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長　楜澤晴樹				
事　務　局	社会教育部長	三浦一浩	青木　源（令和元年度）			
	文化振興課長	東城　洋				
	企　画　幹	岡部政也	吉田　晃（令和元年度）			
	文化財調査係長	山本秀典				
	文化財調査係	小林眞寿	羽毛田卓也	冨沢一明		
		上原　学	久保浩一郎			
	調　査　員	赤羽根篤	赤羽根充江	浅沼勝男	小林妙子	
		堀篭まゆみ	橋詰信子	橋詰勝子	田中ひさ子	
		柳澤孝子	清水律子	堀篭保子	横尾敏雄	
		依田好行	中澤　登	羽毛田利明	木内修一	
		比田井久美子	松本仁宣	高野園美	箕輪由紀	
		大矢志慕				

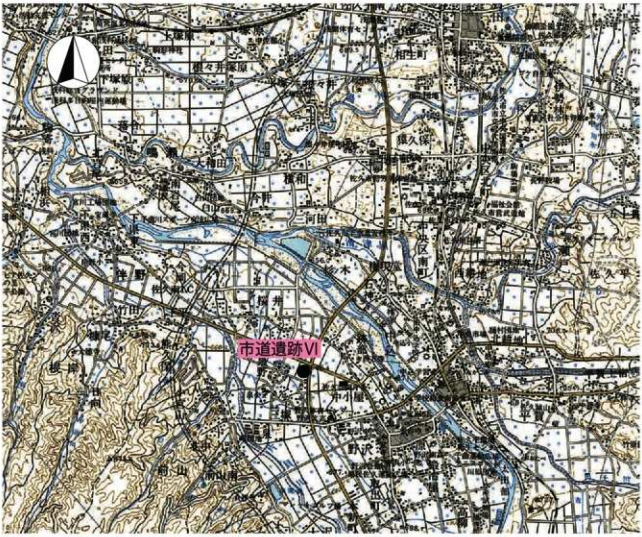
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の経緯

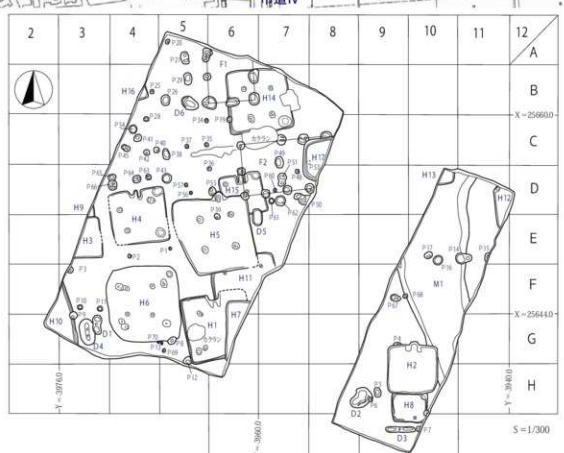
市道遺跡Ⅵは三千束遺跡群の中央に位置し、標高 667 mを僅かに越える沖積微高地に所在する。調査地点の地形は南から北へと緩やかに傾斜する微高地で、この周辺部のみ古くから畑作が営まれていた。今回の調査は市道遺跡としては６次の調査であり、１次が昭和 50 年の周辺部圃場整備に伴う発掘調査であり、２次が平成 10 年の当ホテル建設に伴うものである。また、ホテル敷地に接し東西と南北にのびる国道 141 号と 142 号の拡幅工事の折も発掘調査が行われている。

これら遺跡の調査では古墳時代中期から平安時代に及ぶ集落址が検出された。特に、遺跡周辺部の土質が粘性土ということもあり、調査事例の中にはカマドの残存状況が良好なものも多く、貴重な資料を提示した竪穴住居址もあった。

今回、遺跡群内においてルートインジャパン株式会社がホテルの増築を計画し、文化財保護法 93 条が長野県教育委員会宛て、佐久市教育委員会に届出された。市教育委員会では該地の試掘調査を行い、予定地内から遺構を発見した。保護協議の結果、工事により遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第１図　市道遺跡Ⅵ位置図 (1/50000)



第２図　周辺遺跡及び市道遺跡Ⅵ調査全体図

第２節　調査日誌

令和元年８月 ９日　ルートインジャパン株式会社より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
８月13日　長野県教育委員会へ市教育委員会より元佐教文振第1309-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について（副申）
８月20日　長野県教育委員会より元教文第７－952号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
９月19日　ルートインジャパン株式会社より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
11月12日　ルートインジャパン株式会社と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
12月 ２日～　記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行う。
令和２年４月23日　冬季に調査が及んだ為、新年度に残り分を行う。現場作業終了後に引き続き報告書作成作業を行う。
令和３年３月　報告書を刊行し、記録類・出土品を整理保管してすべての作業を終了する。

第３節　調査の概要

遺　構　竪穴住居址　17 軒（古墳時代中・後期６軒、奈良・平安時代５軒、不明６軒）
掘立柱建物址　２棟
土　坑　６基
溝状遺構　１本
ピット　146 個

遺　物　弥生土器（箱清水式）　土師器　須恵器　灰釉陶器　石製品　鉄製品

第４節　基本層序

今回の調査地点は北方向に向かいゆるやかに傾斜する沖積微高地上に立地する。基本層序は５層に分かれる。遺構確認面はⅤ層上面である。

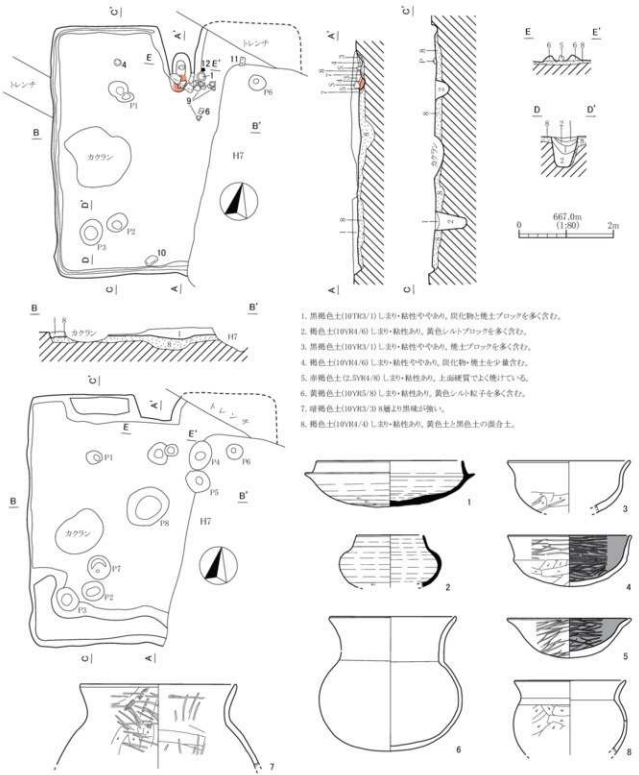
層　序

第Ⅰ層　10YR7/1　灰白色土（盛土）
第Ⅱ層　10YR4/1　褐灰色土　しまり・粘性あり。水田耕作土
第Ⅲ層　5YR3/6　暗赤褐色土　しまり有り。水田下層の鉄分の沈下層
第Ⅳ層　10YR2/1　黒色土　しまり・粘性あり。
第Ⅴ層　10YR5/6　黄褐色土　しまり弱く、粘性あり。細かなシルト層

土層堆積状況

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址



第３図　Ｈ１号住居址及び出土遺物実測図　　1～8 (1:4)

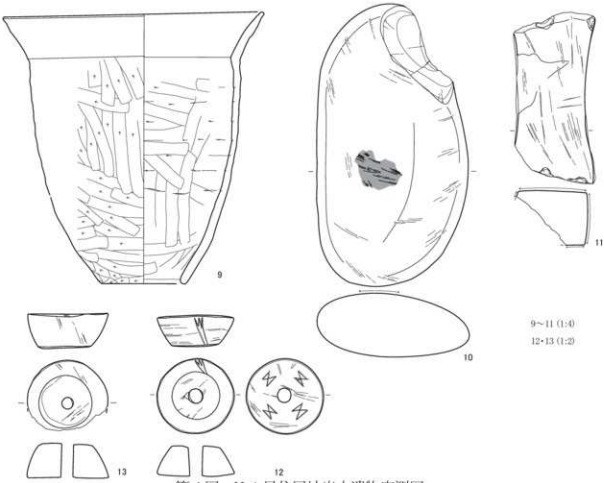
（1）Ｈ１号住居址

本址は調査区中央F・G-5・6Grで検出された。住居東側をH7号住居址により削平されていた。また、北東コーナー部分が削平され形態が確認できなかった。形態は検出された部分で方形を呈する。規模は南北長4.98 m、確認できた東西長4.44 mを測る。検出された部分の床面積は16.0㎡である。主軸方位はN-10°-Wを測る。壁高さは西壁で0.12 mを測る。ピットは掘方も含め８ヶ所検出された。規模はＰ１が径0.55 m・深さ0.30 m、Ｐ２が径0.48 m・深さ0.66 m、Ｐ３が径0.56 m・深さ0.64 m、Ｐ４が径0.62 m・深さ0.55 m、Ｐ５が径0.54 m・深さ0.56 m、Ｐ６が径0.38 m・深さ0.52 m、Ｐ７が径0.48 m・深さ0.60 m、Ｐ８が径0.96 m・深さ0.17 mであった。床は貼床が施され、カマド周辺は特に硬質であった。

カマドは北壁中央に構築されていた。袖と天井部は黄色シルト土と川原石により構築されていた。顕著な火床部と支脚石が検出された。規模は袖長さ1.26m・高さ0.14m、焼土径0.38m・厚さ0.1mを測る。また、掘方は北壁に接する部分は台形状に掘り残されていた。

本址からの出土遺物はカマド周辺部や覆土から比較的まとまって出土した。１は須恵器坏身で完形で、カマド脇から出土した。２は須恵器短頸壺である。３～５は土師器坏で、４は須恵器模倣坏で内面黒色処理されている。カマド東側の床面上より出土した。９は単孔の土師器甑でカマド脇より破砕した状態で出土した。11は大型の砥石で３面の砥面が確認できる。10は磨り石で磨り面と擦痕が確認できる。12と13は石製紡錘車で、特に12は滑石製で上面にさ刻線による三角文が２対、４か所に描かれている。

本址の所産時期はこれらの出土遺物により６世紀中葉と考えられる。



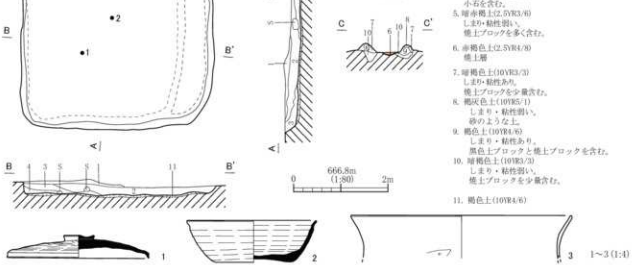
第４図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図

（2）Ｈ２号住居址

本址は調査区東側のG･H−9・10Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長3.61 m、東西長3.87 mを測る。床面積は13.66㎡である。主軸方位はNを示す。壁の高さは0.15～0.25 mを測る。床は0.03～0.07 mの厚さで施され、カマド周辺は特に硬質化していた。カマドは北壁中央につくられ、シルト土で袖がつくられていた。また、袖下にはピットが２ヶ所確認され、構築材の埋め込み跡と考えられる。ピット規模はP1が径0.36m・深さ0.20m、P2が径0.43m・深さ0.15mを測る。

遺物は覆土を中心に出土し３点を図示した。いずれも覆土からの出土で、１は0.15m、２は0.06m床面より浮いた状態で出土した。１は須恵器蓋、２は須恵器坏である。３は土師器甕でいわゆる武蔵甕と呼ばれるものである。

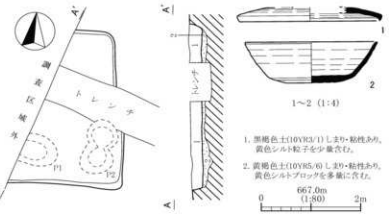
本址の所産時期はこれらの出土遺物から８世紀代と考えられる。



第５図　Ｈ２号住居址及び出土遺物実測図

（3）Ｈ３号住居址

本址は調査区西側のE−3Grで検出された。西側が調査区域外となり、住居の1/3程の検出にとどまった。形態は方形と考えられ、規模は南北長3.12 m、検出部の東西長2.16 mを測る。床面積は検出部で4.69㎡である。主軸方位はN−4°−Wを示す。壁の高さは0.15～0.23 mを測る。床は0.03～0.18 mの厚さで施されていた。ピットは掘方検出時に２ヶ所確認された。規模はP1が検出部で径0.72m・深さ0.14m、P2が径1.12m・深さ0.17mを測る。



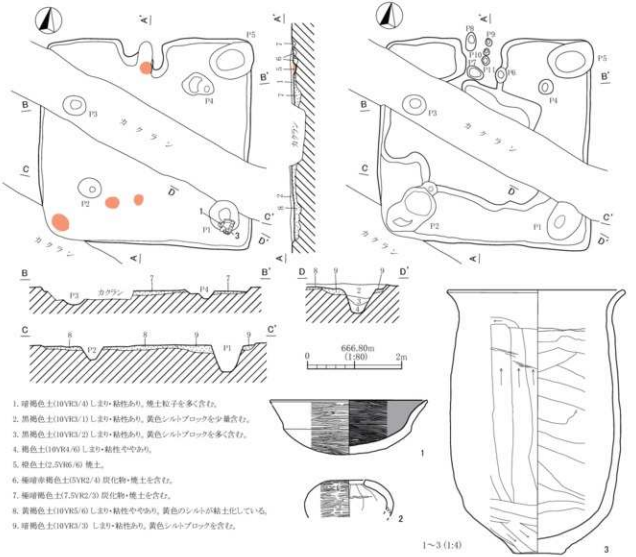
第６図　Ｈ３号住居址及び出土遺物実測図

本址からの出土遺物は少なかったが、２点を図示した。１は須恵器蓋で、天井部を欠損する。２は須恵器坏であり、底部回転糸切離しが施されている。

本址の所産時期はこれらの出土遺物から不確実ではあるが８世紀代と考えられる。

（４）Ｈ４号住居址

本址は調査区西側のＤ・Ｅ−４Ｇｒで検出された。住居中央部分が構築物により削平されていたが、ほぼ全容を調査した。形態は方形で、規模は南北長 4.08 m、東西長 4.32 mを測る。床面積は 17.74 ㎡である。主軸方位は N−８°−W を示す。壁の高さは 0.04 ～ 0.07 mを測る。床は 0.02 ～ 0.08 mの厚さで施され、カマド周辺は特に硬質化していた。カマドは北壁中央につくられ、シルト土で袖がつくられていた。ピットは掘方も含め 11 ヶ所が確認された。規模は P1 が径 0.64m・深さ 0.40m、P2 が径 0.50m・深さ 0.2m、P3 が径 0.52m・深さ 0.11m、P4 が径 0.68m・深さ 0.16m、P5 が径 0.98m・深さ 0.14m、P6 が径 0.30m・深さ 0.05m、P7 が径 0.40m・深さ 0.09m、P8 が径 0.40m・深さ 0.09m、P9 が径 0.18m・深さ 0.07m、P10 が径 0.14m・深さ 0.07m、P11 が径 0.18m・深さ 0.07m を測る。P2 ～ P4 は主柱穴と考えられるが不規則である。住居掘方は中央部分が一段高くなる掘方であった。



第７図　Ｈ４号住居址及び出土遺物実測図

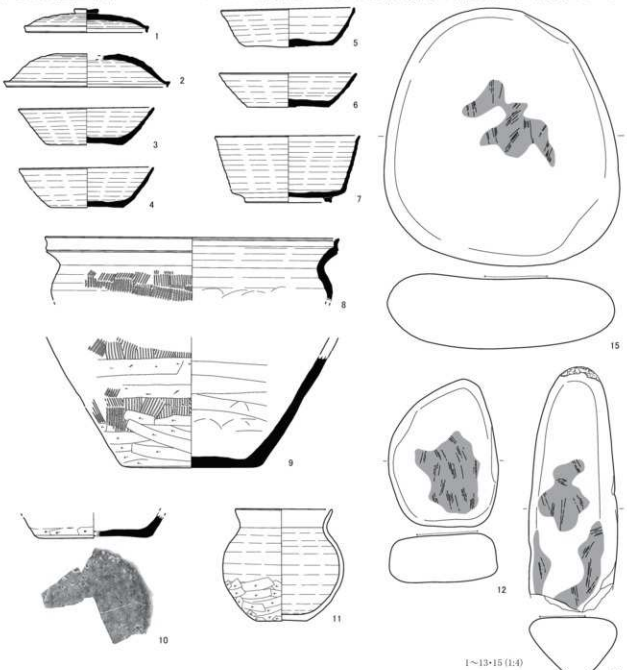
カマドは北壁中央に構築されており、シルト土で袖をつくっていた。火床部は弱く焼けており、焼土の厚みは 0.04m であった。

本址からの出土遺物は少なく３点を図示した。１は土師器坏で、内面黒色処理されている。貯蔵穴と考えられるP1から出土した。２は無頸壺の一部と考えられるが不確実である。３は土師器長胴甕で、１と同じくP1からの出土である。穴に落ち込むように潰れた状態で出土した。

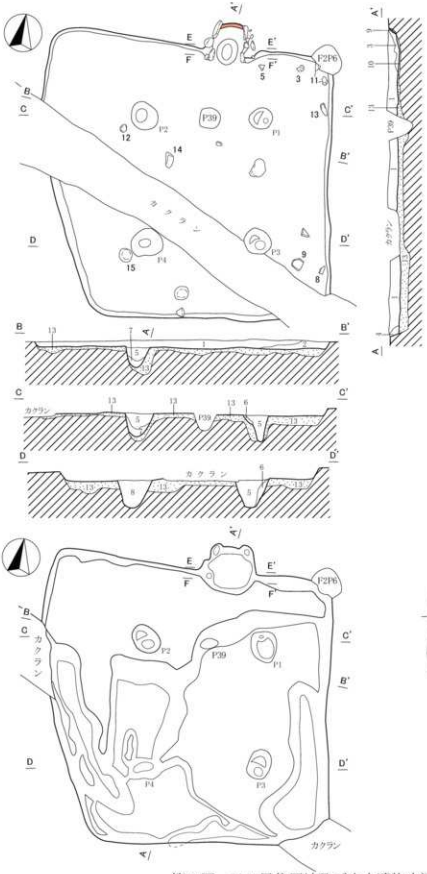
本址はこれらの出土遺物から６世紀代の所産時期と考えられる。

（５）Ｈ５号住居址

本址は調査区中央のＤ・Ｅ・F-5・6Gr で検出された。住居中央部分が構築物により削平されてい



第８図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図



1. 黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロックを含む。

2. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。

3. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。
焼土ブロックを多く含む。

4. 黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性あり。

5. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロックを多く含む。

6. 黄褐色土(10YR5/8) しまり・粘性あり。小石を多く含む。

7. にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまり・粘性弱い。
小石を多く含む。

8. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロックを多く含む。

9. 赤褐色土(2.5YR4/8) 焼土。

10. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性あり。
焼土粒子を多く含む。

11. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。小石を多く含む。

12. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。小石を含む。
11層よりやすいふかい。

13. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。
黄色シルト粘土と黒色土ブロックを多く含む。
一部に焼土を含む。

第９図　Ｈ５号住居址及び出土遺物実測図

たが、ほぼ全容を調査した。形態は西壁がややいびつな方形で、規模は南北長 5.52 m、東西長 6.00 mを測る。床面積は 31.02㎡である。主軸方位は N−8 °−W を示す。壁の高さは 0.13 ～ 0.25 m を測る。貼り床は 0.07 ～ 0.32 m の厚さで施され、カマド周辺は特に硬質化していた。ピットは 4 ヶ所が確認された。これらピットが主柱穴と考えられる。規模は P1 が径 0.48m・深さ 0.54m、P2 が径 0.64m・深さ 0.47m、P3 が径 0.56m・深さ 0.58m、P4 が径 0.68m・深さ 0.51m を測る。住居掘方は複雑な掘方で、カマドから北西コーナー付近は一段高くなる掘方で、南東コーナー付近が一段深く掘り込まれていた。カマドは北壁中央につくられていた。シルト土と川原石で構築され、袖と天井部は残存していなかったが、火床部壁は川原石が立った状態で確認された。火床部の規模は長軸長 0.92m・短軸長 0.64m を測る。

本址からの出土遺物はカマド周辺や床面上から比較的多く出土した。15 点を図示した。1 と 2 は須恵器蓋である。2 は摘み部が欠損している。3 ～ 6 は須恵器坏であり、3 と 4 が底部回転糸切離し、5 と 6 が底部回転ヘラ切りである。7 は有台坏である。8 ～ 10 は須恵器甕であり、10 は底部外面に焼成前のヘラ描沈線が確認できる。11 は土師器の小型甕である。12 ～ 15 は磨り面が確認できる石製品で、いずれも川原石の一面を使用している。

本址はこれらの出土遺物から 8 世紀代の所産と考えられる。

（6）H 6 号住居址

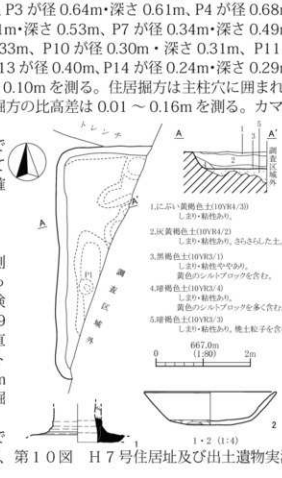
本址は調査区中央の F・G−3・4・5Gr で検出された。本址は圃場整備等ですでに上部が削られ、掘方のみ残存していた。形態は方形で、規模は南北長 5.92 m、東西長 5.60 m を測る。住居面積は 31.19㎡である。主軸方位は N−7 °−W を示す。ピットは 16 ヶ所が確認された。P1 ～ P4 と P5 ～ P8 がそれぞれ対となる主柱穴と考えられる。この事から本住居址は建て替えが考えられる。規模は P1 が径 0.72・深さ 0.71m、P2 が径 0.72m・深さ 0.74m、P3 が径 0.64m・深さ 0.61m、P4 が径 0.68m・深さ 0.73m、P5 が径 0.39m・深さ 0.49m、P6 が径 0.41m・深さ 0.53m、P7 が径 0.34m・深さ 0.49m、P8 が径 0.34m・深さ 0.44m、P9 が径 0.56m・深さ 0.33m、P10 が径 0.30m・深さ 0.31m、P11 が径 0.40m・深さ 0.28m、P12 が径 0.68m・深さ 0.37m、P13 が径 0.40m、P14 が径 0.24m・深さ 0.29m、P15 が径 0.24m・深さ 0.21m、P16 が径 0.17m・深さ 0.10m を測る。住居掘方は主柱穴に囲まれた中央が一段高く、壁際が一段深く掘り込まれている。掘方の比高差は 0.01 ～ 0.16m を測る。カマド等は確認できなかった。

本址からの出土遺物は少なく、2 点を図示したのみである。1 は土師器坏で、内面に放射状の暗文が施されている。2 は磨り石である。本址は出土遺物が少なく不確実ではあるが 7 世紀代の所産と考えられる。

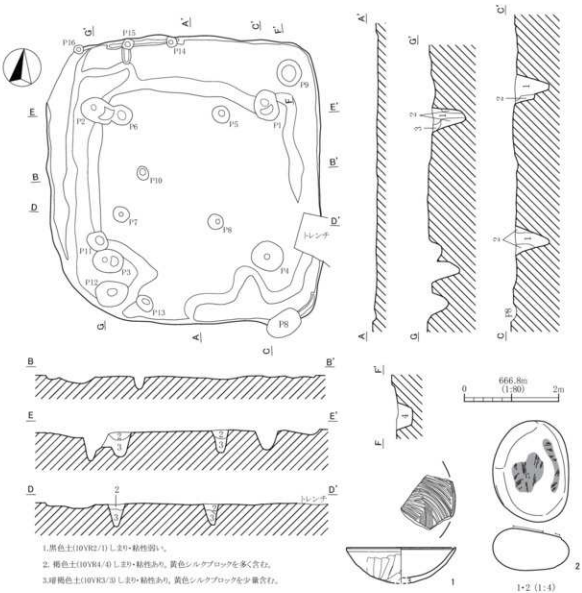
（7）H 7 号住居址

本址は調査区中央の F・G−6 Gr で検出された。東側が調査区域外となるため西壁周辺部の検出にとどまった。形態は方形と考えられ、規模は南北長 4.48 m、検出された東西長 1.68 m を測る。床面積は検出部で 3.79 ㎡である。主軸方位は N−3 °−E を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは 0.27 ～ 0.32m を測る。ピットは一ヶ所確認され、規模は P1 が径 0.32m・深さ 0.43m を測る。床は住居址中心側が厚く貼られており、住居掘方は壁際が一段高くなる掘方であった。

本址からの出土遺物は少なく、2 点を図示したのみである。1 は須恵器長頸壺の肩部である。2 は土師器坏で、



第１０図　Ｈ７号住居址及び出土遺物実測図

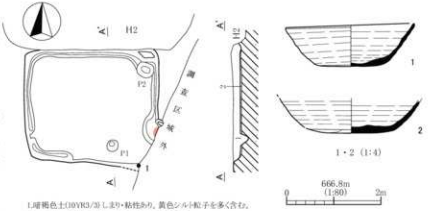


第 11 図　H 6 号住居址及び出土遺物実測図

体部が摩耗で成形痕が不明である。本址は出土遺物が少なく不確実ではあるが 7 世紀代の所産と考えられる。

（8）H 8 号住居址

本址は調査区東の H・I-9・10Gr で検出された。北側を H2 号住居址により一部削平されている。形態は方形で、規模は南北長 2.16 m、東西長 2.52 m を測る。住居面積は 31.19㎡である。主軸方位は N を示す。



第 12 図　H 8 号住居址及び出土遺物実測図

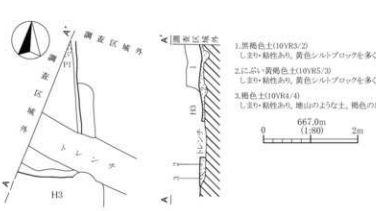
壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは 0.05 ～ 0.20m を測る。壁下には壁溝が巡っており、規模は幅 0.12 ～ 0.22m、深さ 0.03 ～ 0.05m を測る。ピットは２ヶ所確認され、規模は P1 が径 0.26m・深さ 0.18m、P2 が径 0.36m・深さ 0.25m を測る。床は全体に薄く貼られており、硬質であった。

カマドは南東コーナー付近に一部焼土が確認できたが、ほとんどが調査区域外となるためカマドとしてよいかは確証を得なかった。

本址からの出土遺物は少なく、２点を図示したのみである。。１と２は須恵器坏ある。底部は手持ちヘラ削りである。本址は出土遺物が非常に少なく不確実であるが、８世紀代の所産と考えられ、同じ８世紀代の所産の H2 よりは遺構の新旧関係より本址の方が古い。

（9）H９号住居址

本址は調査区西よりの D・E-3Gr で検出された。西側が調査区域外となるため東壁周辺部の検出にとどまった。形態は方形と考えられ、規模は検出部の南北長 2.72 m、検出された東西長 1.12 m を測る。床面積は検出部で 1.73㎡である。主軸方位は N-５°-W を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは 0.05 ～ 0.23m を測る。ピットは一ヶ所確認され、規模は P1 が径 0.28m・深さ 0.14m を測る。貼り床は地山の褐色土のような土であった。

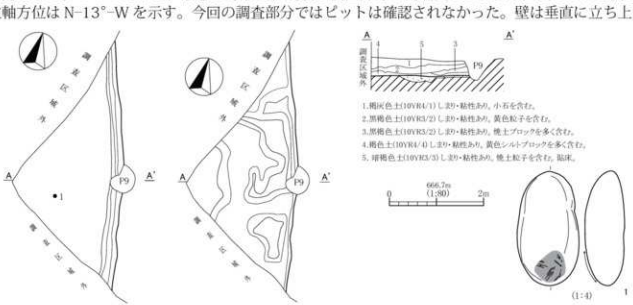


第 13 図　H ９号住居址実測図

本址からの出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。よって所産時期も不明である。

（10）H 10 号住居址

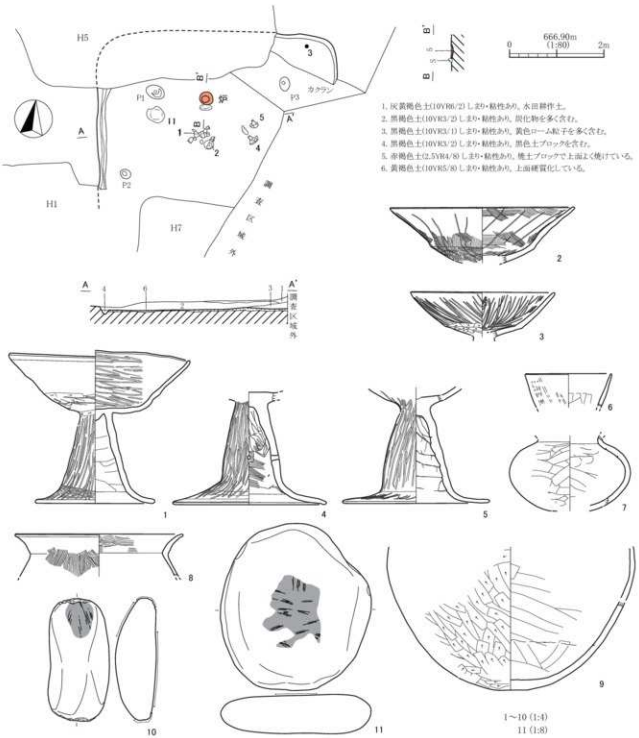
本址は調査区西側の F・G-2・3Gr で検出された。西側と南側が調査区域外となるため、東側壁の一部のみ検出された。また、本址は第 29 図で示したように昭和 49 年調査の H4 号住居址の一部と確認された。このことから、形態は方形で、規模は検出部分の南北長 9.4 m、東西長 8.4 m を測る。主軸方位は N-13°-W を示す。今回の調査部分ではピットは確認されなかった。壁は垂直に立ち上が



第 14 図　H 10 号住居址及び出土遺物実測図

り、壁高さは 0.36 ～ 0.40m を測る。壁下には壁溝が巡り、規模は幅 0.20 ～ 0.28m、深さ 0.06 ～ 0.08m を測る。住居掘方は凹凸が激しく、貼床は 0.04 ～ 0.09m の厚みで確認された。

本址からの出土遺物は少なく、図示可能なものは 1 の磨り石のみであった。所産時期は今回の出土遺物からは判断できないが、昭和 49 年の調査では 6 世紀前葉の土器がまとまって出土している。



第 15 図　H 11 号住居址及び出土遺物実測図

(11) H 11 号住居址

本址は調査区中央のE・F−6・7Grで検出された。本址は東側を調査区域外、南側をH 1・7号住居址、北側をH 5号住居址により削平されている。形態は方形と考えられ、規模は残存の南北長3.64m、東西長4.68mを測る。床面積は検出部で10.53㎡である。主軸方位はN−6°−Wを示す。壁の高さは0.12～0.19mを測る。床は0.04～0.07mの厚さで施され、炉周辺は特に硬質化していた。ピットは掘方も含め3ヶ所が確認された。規模はP1が径0.40m・深さ0.48m、P2が径0.24m・深さ0.11m、P3が径0.30m・深さ0.50mを測る。P1とP3は主柱穴の可能性がある。

炉は中央北壁よりに構築されていた。いわゆる枕石が置かれ、炉の中央はよく焼けていた。焼土の径は0.30m・深さ0.03mを測る。

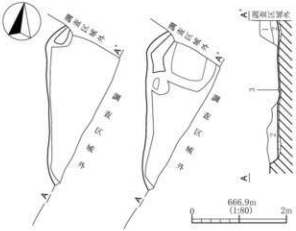
本址からは床面上から多くの遺物が出土した。1～11を図示した。1～5は土師器高坏である。2は高坏坏部の内外面に放射状の暗文が施されている。4は高坏脚部であるが、脚中央に焼成前の穿孔がある。6と7はいわゆる小型丸底壺の口縁部と体部である。8は土師器甕で、頸部が「く」の字に曲がるタイプのものである。9は土師器甕の胴部から底部あり、底部は丸底ぎみである。10は磨り石、11は磨りの使用痕がある台石と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から5世紀中葉、特にカマド導入前の所産時期と捉えられ、佐久地域には希少な事例と考えられる。

(12) H 12 号住居址

本址は調査区東側のD・E−11・12Grで検出された。本址は東側が調査区域外となるため西側の一部のみの検出となった。形態は不明で、規模は検出された南北長2.80m、検出された東西長1.52mを測る。床面積は検出部で2.56㎡である。主軸方位は不明で、壁高は0.14～0.16mを測る。床は0.02～0.17mの厚さで施されていた。掘方は北西側が一段低くなっていた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、いわゆる武蔵甕を含む土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

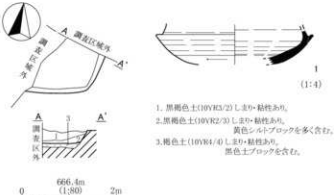


第16図　H 12 号住居址実測図

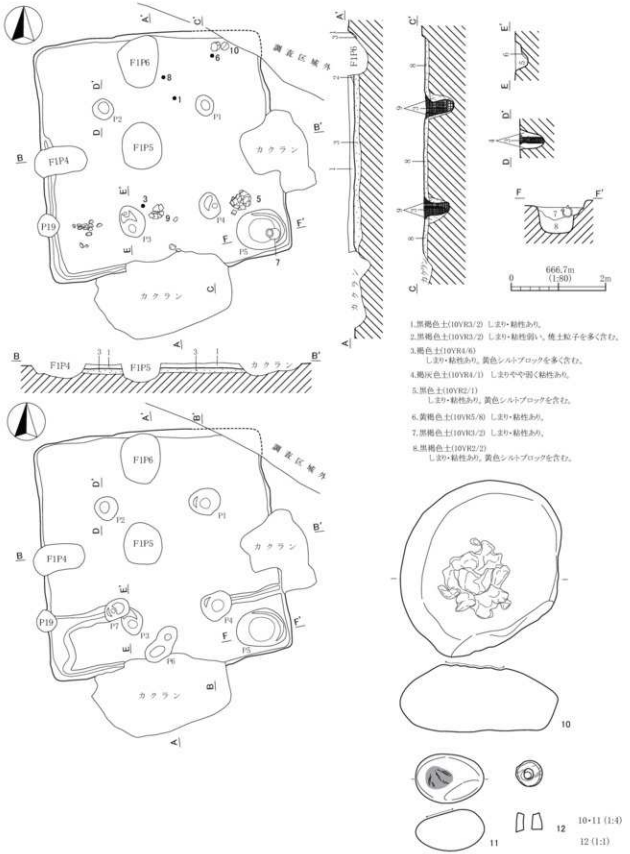
(13) H 13 号住居址

本址は調査区東側のD−10Grで検出された。本址は北側と西側が調査区域外となるため住居南東コーナーのみの検出となった。形態は不明で、規模は検出された南北長0.72m、検出された東西長1.12mを測る。床面積は検出部で0.97㎡である。主軸方位は不明で、壁高は0.09～0.15mを測る。床は0.09～0.12mの厚さで施されていた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、1点を図示したのみである。1は須恵器坏身であり、いわゆる武蔵甕を含む土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



第17図　H 13 号住居址及び出土遺物実測図



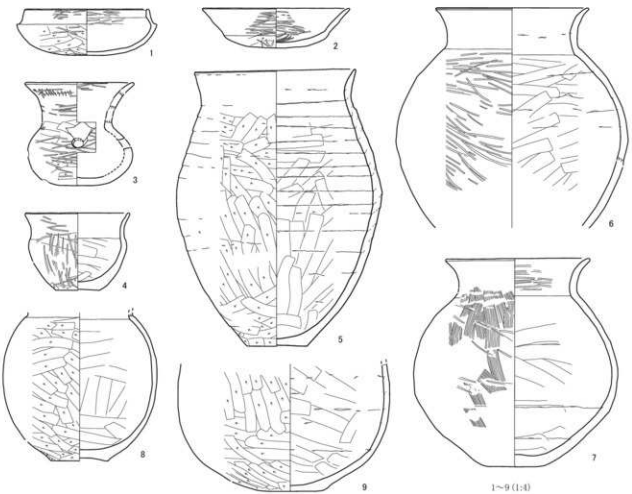
第18図　H 14号住居址及び出土遺物実測図

（14）H 14 号住居址

本址は調査区北側の B･C–6･7Gr で検出された。形態は方形で、規模は南北長 4.88 m、東西長 4.73 mで、住居床面積は推定で 22.12㎡である。主軸方位は N–8 °–W を示す。壁高さは 0.09 ～ 0.13m を測り、床は 0.05 ～ 0.10m の厚みで貼られていた。壁直下は一部に壁溝が巡り、間仕切り溝的な部分も確認できた。ピットは掘方時も含め 7 ヶ所確認された。P1・P2・P7・P4 が主柱穴、P5 が貯蔵穴と考えられる。規模は P1 が径 0.44・深さ 0.60m、P2 が径 0.42m・深さ 0.51m、P3 が径 0.72m・深さ 0.35m、P4 が径 0.56m・深さ 0.53m、P5 が径 1.04m・深さ 0.57m、P6 が径 0.88m・深さ 0.13m、P7 が径 0.56m・深さ 0.41m を測る。本址の竈は検出されなかったが、残存状況から東カマドの可能性が高い。

本址からの出土遺物は床面上や貯蔵穴を中心に多く出土した。12 点を図示した。1 と 2 は土師器坏で、1 は須恵器坏身の模倣である。3 は土師器の甕であり、焼成前の孔が開けられている。4 は土師器の小型甕である。5 は土師器の甕で、貯蔵穴脇の床面上より潰れた形で出土した。6 ～ 9 は土師器甕で、7 は貯蔵穴内より落ち込んだ滋養体で出土した。10 は敲き石であり、台石的な使用が考えられる。11 は磨り石、2 は滑石製の臼玉である。

本址はこれらの資料から 6 世紀前半の所産時期と考えられる。



第 19 図　H 14 号住居址出土遺物実測図

（15）H 15 号住居址

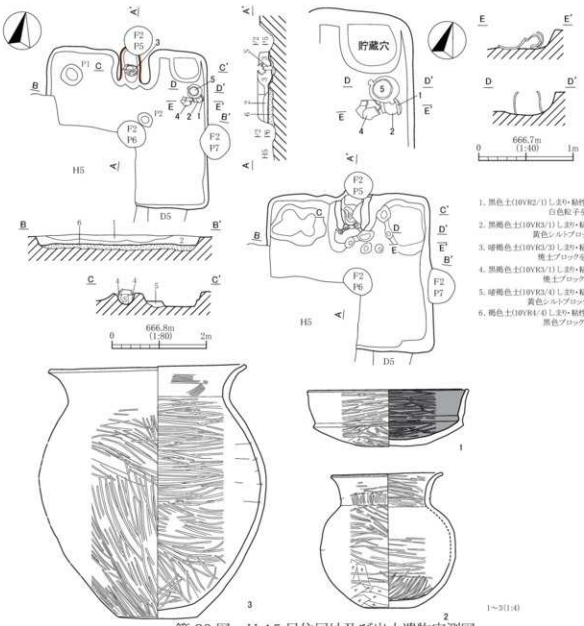
本址は調査区中央の D–6・7Gr で検出された。形態は方形で、南西コーナー部を H5 号住居址により削平されている。規模は南北長 3.08 m、東西長 3.28 m で、住居床面積は残存で 7.0㎡である。主

軸方位は N−10°−W を示す。壁高さは 0.14 ～ 0.19m を測り、床は 0.05 ～ 0.13m の厚みで貼られていた。ピットは掘方時も含め 7 ヶ所確認された。規模は P1 が径 0.44・深さ 0.10m、P2 が径 0.33m・深さ 0.10m、P3 が径 0.36m・深さ 0.07m、P4 が径 0.36m・深さ 0.05m、P5 が径 0.24m・深さ 0.01m、P6 が径 0.25m・深さ 0.04m、P7 が径 0.18m・深さ 0.04m を測る。また本址のカマド東脇には貯蔵穴が検出された。規模は長軸 1.33m・短軸 1.16m、深さ 0.10m を測り、底面は平坦であった。

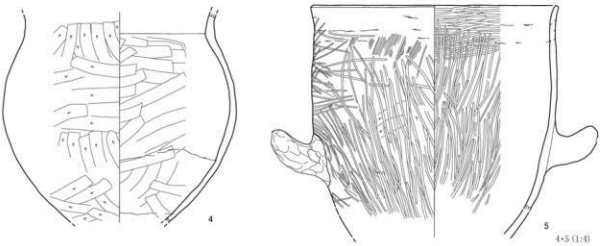
カマドは北壁中央に構築されていた。袖部は地山削り出しで、中央に支脚石が原位置を保って立っていた。また、支脚石の上には図示した 3 の土師器甕がかけられた状態で出土した。

本址からの出土遺物は先に触れたカマドや貯蔵穴南側の床面上からまとまって出土した。1 は土師器坏でほぼ完形品である。内面黒色処理が施されており丁寧なミガキがある。H1 号住居址出土の須恵器坏身とセットとなる法量である。2 ～ 4 は土師器甕である。3 は丁寧なミガキが施されている。5 は土師器取手付甑である。口縁部を床面に伏した状態で出土した。

本址はこれらの資料から 6 世紀前半の所産時期と考えられる。



第 20 図　H 15 号住居址及び出土遺物実測図

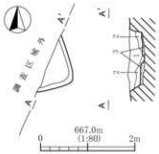


第 21 図　H 15 号住居址出土遺物実測図

(16) H 16 号住居址

本址は調査区西側の B-4Gr で検出された。住居址のほとんどが調査区域外となり、検出は住居南東コーナー部分のみである。形態は方形と考えられる。規模は検出南北長 0.75 m、検出東西長 0.56 m で、住居床面積は検出部分で 0.34㎡を測る。主軸方位は N-16°-W を示す。壁高さは 0.26 ～ 0.29m を測り、床は 0.06m の厚みで貼られていた。

本址からの出土遺物はなく、よって所産時期も不明である。

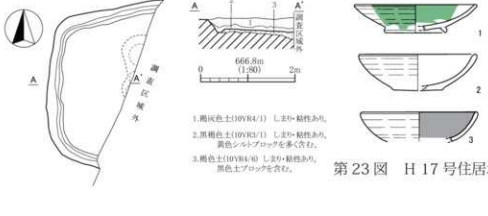


第 22 図　H 16 号住居址実測図

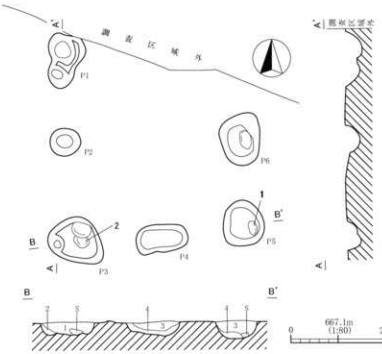
(17) H 17 号住居址

本址は調査区中央の C・D-7・8Gr で検出された。東側は調査区域外となる。形態は方形と考えられ、規模は検出南北長 2.68 m、検出東西長 1.68 m で、住居床面積は検出部で 3.68㎡である。主軸方位は N-2°-E を示す。壁高さは 0.19 ～ 0.25 m を測る。床は中央部分が硬質で、貼床は 0.05 ～ 0.07m の厚みで貼られていた。壁溝は幅 0.20 ～ 0.24m、深さ 0.05 ～ 0.07m で、検出された壁際に一周するように巡っていた。

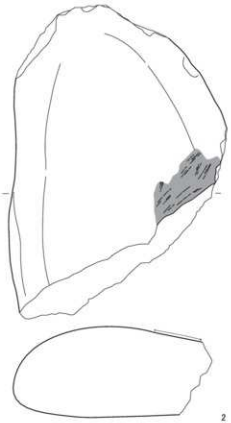
本址からの出土遺物は少なかったが 3 点を図示した。1 は灰釉陶器皿であり、釉薬は浸け掛けと考えられる。2 と 3 は土師器坏で、3 は内面黒色処理されている。本址はこれらの遺物より不確実ではあるが 10 世紀代に位置づけられると考える。



第 23 図　H 17 号住居址及び出土遺物実測図



1. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックあり。
2. 褐色土(10YR4/6) しまり・粘性あり。
3. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。
4. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。黄色のシルトブロックを含む。



1・2 (1:4)

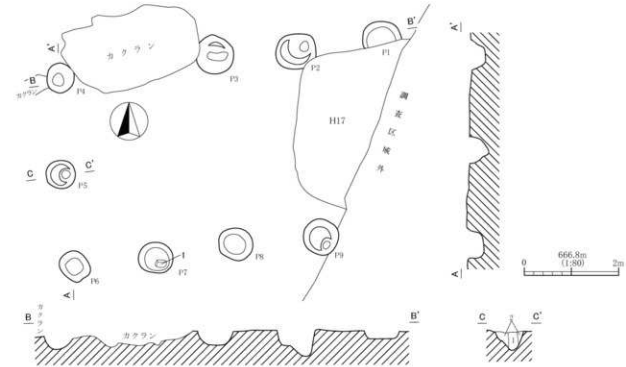
第24図　F1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

第２節　掘立柱建物址

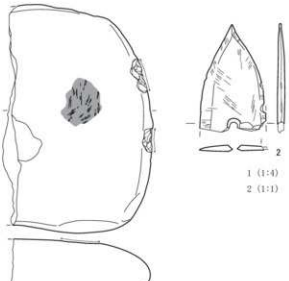
（１）F1号掘立柱建物址

本址は調査区北側のA・B-5・6Grで検出された。北側は調査区域外となる。形態２間×３間以上の側柱式建物址と考えられる。規模は検出桁行長4.16m、梁行長4.0mで、主軸方位はN-３°-Wを示す。各ピットの規模は、P1が径1.56m・深さ0.34m、P2が径0.64m・深さ0.30m、P3が径1.21m・深さ0.29m、P4が径1.12m・深さ0.23m、P5が径0.96m・深さ0.33m、P6が径1.12m・深さ0.36mを測る。ピット内には図示したように大型で磨り面が確認できる川原石が検出されたものもある。

本址からの出土遺物は少なく土器類はいずれも小片であった。種別としては土師器坏や土師器甕であり、甕はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる破片が多く、本址の時期を示唆するものと考えられる。図示した礫はピット内からの出土で、いずれも顕著な磨り面が確認できる。



1. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。
2. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを多く含む。



第 25 図　F 2 号掘立柱建物址及び
出土遺物実測図

（2）F 2 号掘立柱建物址

本址は調査区北側の C・D-6・7・8Gr で検出された。東側は調査区域外となる。形態 2 間×4 間以上の側柱式建物址と考えられる。規模は検出桁行長 6.88 m、梁行長 4.0 m で、主軸方位は N-84°-E を示す。各ピットの規模は、P1 が径 0.88m・深さ 0.20m、P2 が径 0.84m・深さ 0.54m、P3 が径 0.88m・深さ 0.31m、P4 が径 0.64m・深さ 0.32m、P5 が径 0.60m・深さ 0.41m、P6 が径 0.64m・深さ 0.32m、P7 が径 0.72m・深さ 0.20m、P 8 が径 0.72m・深さ 0.17m、P 9 が径 0.76m・深さ 0.27m を測る。

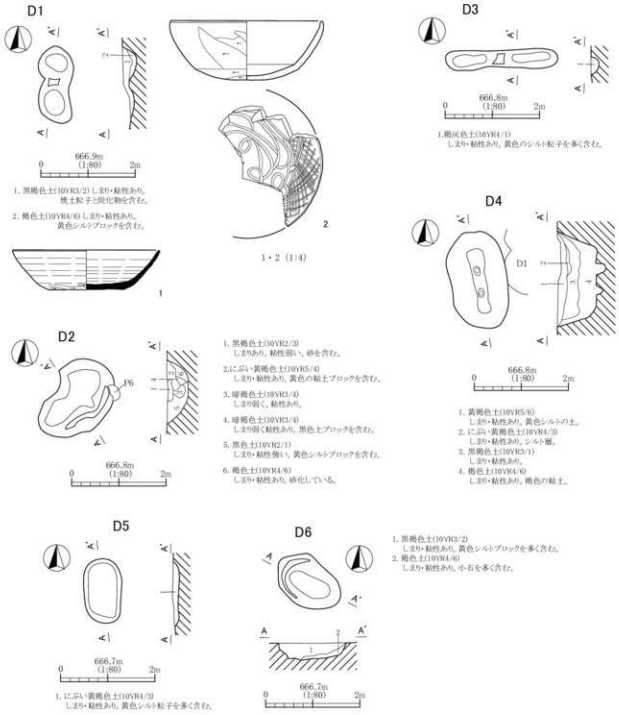
本址からの出土遺物は少なく土器類は小片であった。P3 からは須恵器坏片や土師器甕でいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土器片が出土した。図示したのは磨り石と磨製石鏃である。

よって本址の所産時期は不明であるが、出土遺物より F1 号掘立建物址と近似する時期と考えられる。

第３節　土　坑

今回の調査では６基の土坑を調査した。いずれも形態が整うものは無かったが、Ｄ３号土坑は調査区域外に掘立柱建物址がのびるのかもしれない。また、Ｄ４号土坑は形状から落とし穴としての使用が考えられる。

出土遺物は D1 号土坑が須恵器坏と土師器坏を図示した。その他の土坑からはいずれも小片の土器類で、D5 号と D6 号土坑からはいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕片が出土している。



第 26 図　土坑及び出土遺物実測図

第1表　土坑計測表

単位(m)　〈 〉検出値

遺構名	形態	検出位置	長軸長	短軸長	深さ	出土遺物	備考
D1	不整形	G-3	1.61	0.60	0.30		
D2	不整形	H-8・9	1.88	1.12	0.48		
D3	不整形	I-9・10	2.36	0.36	0.22		
D4	楕円形	G-3	2.08	1.20	0.80		
D5	楕円形	D・E-7	1.36	0.80	0.15	土師器甕　土師器坏	
D6	楕円形	B-5	1.52	0.96	0.36	土師器甕　須恵器蓋	

第4節　溝状遺構

（1）M1号溝状遺構

本址は調査区東側で検出された。調査区を南北に貫くように確認され、北側に向かうに従い幅も広がり、深さも深くなる傾向にあった。検出された規模は幅 4.60 ～ 5.70m・深さ 0.37 ～ 0.50m を測る。覆土は自然堆積であり、溝底面は川原石の礫層となった。

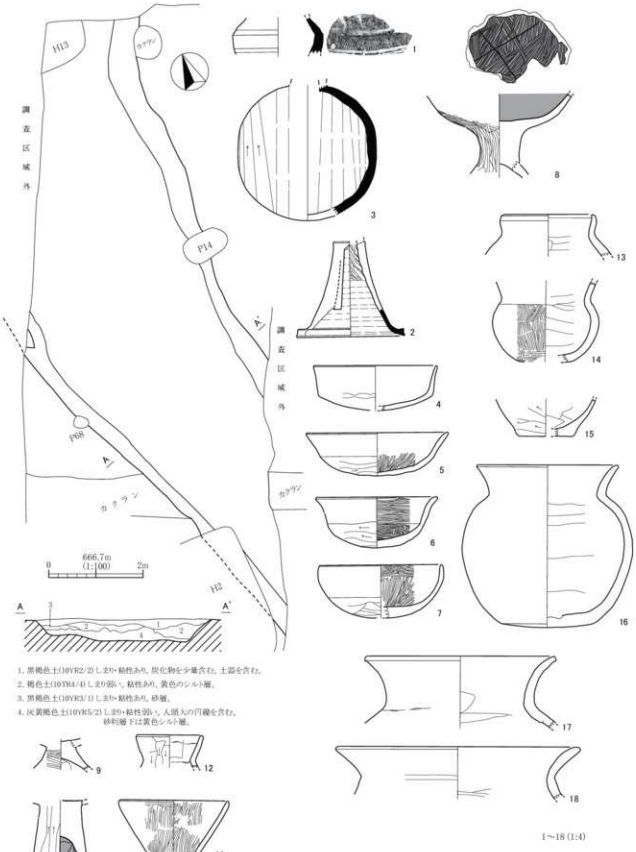
遺物は溝西側の斜面から多く出土した。いずれも細かな細片になっているものが多かった。図示できたものは比較的多く、須恵器・土師器を中心に弥生土器甕や打製石斧・管玉等多彩であった。本址の所産時期であるが、出土遺物は古墳時代後期のものが主体で、一部に弥生時代のものが含まれる状況であった。このことから本址は古墳時代後期に溝状の窪地として存在したと考えられる。

第5節　ピット

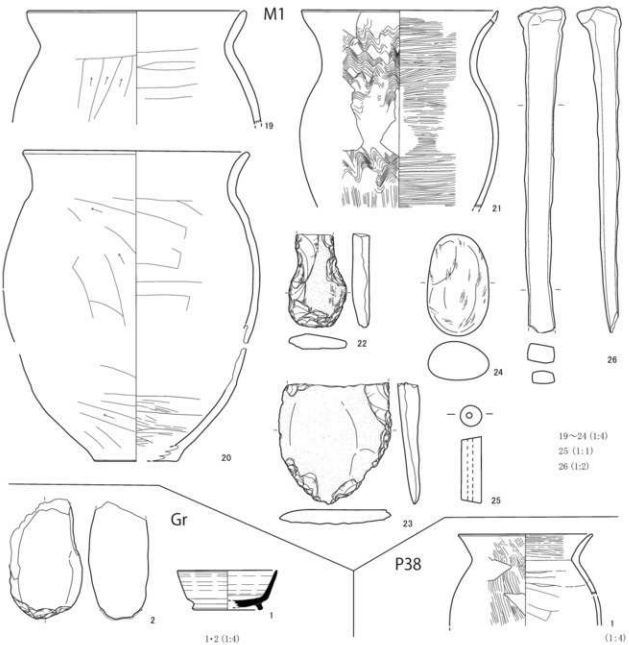
第2表　ピット計測表

（）推定　〈 〉残存　（単位 cm）

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物 重複関係	備考	遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物 重複関係	備考
P1	E-5	35.0	23.0	17.0	円形		黒色土(10YR2/1)	P56	D-6	35.0	32.0	16.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P2	E-4	16.0	14.0	8.0	円形		黒色土(10YR2/1)	P57	C-5	34.0	31.0	24.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P3	F-3	48.0	(36.0)	17.0	円形		黒色土(10YR2/1)	P58	C-5	90.0	56.0	13.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P4	G-9	68.0	(36.0)	31.0	不明	土師甕　H2より古	黒色土(10YR2/1)	P59	E-6	51.0	41.0	49.0	円形	須恵甕　土師甕 H5より新	黒褐色土(10YR2/1)
P5	H-9	74.0	55.0	18.0	楕円形		黒色土(10YR2/1)								
P6	H-9	36.0	30.0	42.0	円形	D2より新	黒色土(10YR2/1)	P60	C-4	50.0	48.0	34.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P7	I-10	42.0	(24.0)	18.0	不明		黒色土(10YR2/1)	P61	C-4	66.0	56.0	29.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P8	G-5	76.0	49.0	20.0	楕円形	H6より新	黒色土(10YR2/1)	P62	C-4	46.0	44.0	13.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P9	G-3	65.0	60.0	45.0	円形	H10より新	黒色土(10YR2/1)	P63	D-5	74.0	70.0	18.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P10	F-3	42.0	42.0	5.0	円形		黒色土(10YR2/1)	P64	F2(P5) に 変 更						
P11	F-3	43.0	40.0	4.0	円形		黒色土(10YR2/1)	P65	C-4	70.0	42.0	31.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P12	G-5	71.0	(64.0)	35.0	不明	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P66	F2(P1) に 変 更						
P13	G-5	22.0	20.0	6.0	円形	土師坏	褐灰色土(10YR5/1)	P67	F2(P2) に 変 更						
P14	E-11	129.0	64.0	54.0	楕円形	土師甕　M1より新	黒褐色土(10YR3/2)	P48	D-7	37.0	34.0	15.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P15	E-11	74.0	(22.0)	39.0	不明	土師甕	黒褐色土(10YR3/2)	P49	C-7	92.0	64.0	15.0	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P16	E-10	80.0	72.0	22.0	円形	須恵坏　土師甕・甕 M1より新	黒褐色土(10YR3/2)	P50	D-7	(117)	81.0	48.0	不整形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
								P51	D-7	(90.0)	58.0	18.0	不整形	土師坏(内黒)	黒色土(10YR2/1)
P17	E-10	66.0	50.0	30.0	楕円形	土師坏・甕 M1より新	黒褐色土(10YR3/2)	P52	F2(P9) に 変 更						
P18	F1(P4) に 変 更							P53	C-7	42.0	41.0	18.0	円形	H7より古	黒色土(10YR2/1)
P19	C-6	47.0	44.0	22.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P54	C-4	72.0	70.0	25.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P20	A-5	44.0	32.0	24.0	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P55	D-6	73.0	47.0	15.0	楕円形	H5より古	黒色土(10YR2/1)
P21	A-5	106.0	60.0	65.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P56	D-5	25.0	22.0	8.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P22	F1(P1) に 変 更							P57	D-5	31.0	26.0	18.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P23	F1(P2) に 変 更							P58	F2(P6) に 変 更						
P24	F2(P7) に 変 更							P59	F2(P8) に 変 更						
P25	B-4	36.0	32.0	32.0	円形		黒色土(10YR2/1)	P60	D-7	30.0	27.0	12.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P26	B-5	88.0	68.0	11.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P61	D-7	44.0	43.0	12.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P27	F1(P5) に 変 更							P62	D-7	88.0	80.0	19.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P28	C-4	48.0	42.0	27.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P63	D-4	44.0	44.0	13.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P29	B-5	98.0	56.0	39.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P64	D-4	72.0	66.0	18.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P30	F1(P3) に 変 更							P65	D-4	63.0	44.0	11.0	楕円形	土師高坏 P66より古	黒色土(10YR2/1)
P31	F1(P6) に 変 更							P66	D-4	80.0	72.0	45.0	円形	土師坏・甕 P65より新	黒色土(10YR2/1)
P32	F2(P4) に 変 更							P67	F-9	34.0	22.0	12.0	不整形		黒色土(10YR2/1)
P33	F2(P3) に 変 更							P68	F-9	45.0	33.0	11.0	円形	M1より新	黒色土(10YR2/1)
P34	C-5	38.0	36.0	24.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P69	G-5	32.0	24.0	8.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P35	C-5	35.0	34.0	23.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P70	G-4	21.0	19.0	6.0	円形		黒色土(10YR2/1)



第 27 図　M1 号溝状遺構及び出土遺物実測図



第 28 図　M1 号溝状遺構及びピット・検出遺物実測図

第Ⅲ章　調査成果

調査を通しての成果をここで列記しまとめとしたい。まず、第 1 点目として昭和 49 年に行われた第 1 次の調査範囲が接することが確認できたことは調査成果の一つと捉えられる。また、佐久市では検出例の少ない 5 世紀中葉の住居址 1 軒が確認されたことも貴重である。近接する宮添遺跡で古墳時代前期の遺構が発見されているため、市道遺跡周辺で古墳時代の段階的発展が把握できる見通しがついてきた。最後に H1 号住居址出土の石製紡錘車がある。この紡錘車には上面に三角文を組み合わせた文様を四か所施文している。古墳時代の石製紡錘車は刻線による文様が知られているが、今回発見された形態は管見に触れない。今後の類例調査が必要であるが希少な発見と言える。

以上雑駁であるが調査のまとめとしたい。

第３表　出土遺物観察表（１）

(cm)　(g)

H1	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値()	残存率()	残存率(%)	出土位置●
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考			
1	須恵器	坏	15.6	－	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	完全実測			
2	須恵器	短頸壺	(7.2)	－	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ 体部下端回転ヘラケズリ	実測			Ⅱ区・HT Ⅱ区
3	土師器	坏	(13.0)	－	(5.5)	刷毛	口縁ヨコナデ 底部ヘラナズリ→ヘラくずれ	実測			Ⅱ区
4	土師器	坏	13.1	12.0	5.4	ミガキ→黒色処理	ヘラくずれ 底部ヘラケズリ	完全実測			
5	土師器	坏	(13.2)	－	4.2	ミガキ→黒色処理	ヘラくずれ	実測			
6	土師器	短頸壺	(13.4)	－	14.3	擬輪	擬輪	完全実測			Ⅱ区
7	土師器	甕	(16.6)	－	(8.9)	ナデ→ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	実測			Ⅱ・■区 ケン
8	土師器	短頸壺	(11.8)	－	(7.8)	ナデ	ヘラケズリ	実測			Ⅱ区
9	土師器	甕	(27.7)	8.6	28.5	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測			P4 Ⅰ・Ⅱ区 HT

No.	素材	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
10	石器	台石	30.0	16.1	7.1	4.9kg	被熱なし 全体に擦痕 すり面1	
11	石器	砥石	(18.1)	(8.7)	(5.0)	(910.0)	被熱なし 置面又は 砥面数4	
12	石器	紡錘車	最大径 4.1	最小径 3.5	1.6	36.93	孔径0.70 被熱なし 側面・置面に刻書	
13	石器	紡錘車	最大径 (3.8)	最小径 3.6	(1.6)	(32.97)	孔径0.60 被熱なし 約1/2欠損	Ⅱ区

H2	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値()	残存率()	残存率(%)	出土位置●
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考			
1	須恵器	蓋	14.1	つまみ径 3.3	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部不持ち→ヘラケズリ	完全実測			
2	須恵器	坏	(13.8)	8.0	4.3	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ→右回転糸切り 火だすき痕	実測			Ⅱ区
3	土師器	甕	(23.4)	－	(4.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	実測			カッコ

H3	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値()	残存率()	残存率(%)	出土位置●
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考			
1	須恵器	蓋	(14.0)	－	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	実測			
2	須恵器	坏	(13.2)	6.0	4.2	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 底部左回転糸切り 火だすき痕	実測			

H4	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値()	残存率()	残存率(%)	出土位置●
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考			
1	土師器	坏	16.6	13.4	5.8	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ	完全実測			
2	土師器	無頸壺	(3.6)	－	(3.0)	ヘラナデ	ヘラミガキ	実測			Ⅰ・Ⅱ区
3	土師器	長頸壺	18.9	5.2	27.8	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	完全実測			

H5	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値()	残存率()	残存率(%)	出土位置●
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考			
1	須恵器	蓋	(12.4)	つまみ径 2.6	2.5	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ つまみ貼付 火だすき痕	完全実測			Ⅰ・Ⅱ区ホリ
2	須恵器	蓋	(16.4)	－	(3.5)	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ 火だすき痕	実測			Ⅰ区 Ⅰ・Ⅱ区ホリ
3	須恵器	坏	14.4	7.6	3.9	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ→右回転糸切り	完全実測			Ⅰ区ホリ
4	須恵器	坏	(14.6)	7.6	4.2	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ→右回転糸切り	完全実測			Ⅱ区
5	須恵器	坏	14.2	8.2	4.1	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ→右回転ヘラ切り 火だすき痕	完全実測			Ⅱ区
6	須恵器	坏	(14.6)	(8.6)	3.6	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ→右回転ヘラ切り 火だすき痕	実測			Ⅱ区
7	須恵器	有台坏	(15.4)	9.0	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ→回転糸切り→高台貼付	完全実測			Ⅱ区
8	須恵器	甕	(31.0)	－	(6.7)	当て具痕	平行タタキ	実測			
9	須恵器	甕	－	14.2	(13.8)	当て具痕→ナデ	平行タタキ→ナデ 下部手持ちヘラケズリ	完全実測			VIIX
10	須恵器	甕	－	(11.2)	(2.2)	ナデ 自然釉付着	ナデ 下部手持ちヘラケズリ 底部にヘラ記号	実測			Ⅱ区ホリ VIIX
11	土師器	小型甕	10.3	5.2	11.9	ロクロナデ	ロクロナデ→回転糸切り 下部手持ちヘラケズリ	完全実測			Ⅱ・■区

No.	素材	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
12	石器	磨石	15.6	11.6	5.2	1631.0	被熱なし すり面1	
13	石器	磨・敲石	(26.0)	(9.5)	(6.0)	(2300.0)	被熱なし 下部欠損 すり面1 敲部に敲打痕	
14	石器	台石	(32.7)	(18.0)	(9.0)	(8.2)kg	被熱なし 側面欠損 すり面1(置面にもあり)	
15	石器	台石	27.4	25.0	7.5	8.5kg	被熱なし すり面1	

H6	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値()	残存率()	残存率(%)	出土位置●
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考			
1	土師器	坏	(11.6)		(3.8)	暗文	ヘラケズリ	実測			P1

No.	素材	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
2	石器	磨石	10.8	8.1	4.4	545.0	被熱なし すり面2	

H7	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値()	残存率()	残存率(%)	出土位置●
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考			
1	須恵器	長頸壺			(4.1)	ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ 自然釉付着	実測			Ⅰ区
2	土師器	坏	14.0	9.0	3.5	ナデ 擬輪	ナデ 底部ヘラケズリ 擬輪	実測			Ⅰ区 Ⅰ区ホリ

第４表　出土遺物観察表（２）

(cm)　(g)

H8	種別	器種	法量			成形・調整・文様		測定値( )残存値< >入成●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	坏	13.7	6.6	4.4	ロクロナデ　丸だす底	ロクロナデ→回転ヘラ切り→一手持ちヘラケズリ　丸だす底	完全実測	
2	須恵器	坏	－	9.0	<3.7>	ロクロナデ	ロクロナデ→回転ヘラ切り	完全実測	Ⅱ区

H10	素材	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	測定値( )残存値< >	出土位置
1	石器	磨石	12.1	6.6	4.4	471.0	被熱なし、すり面1		

H11	種別	器種	法量			成形・調整・文様		測定値( )残存値< >入成●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	高坏	19.3	(12.2)	16.2	坏部ヘラミガキ　脚部ナデ	坏部ナデ　坏下部ハケケズリ→ヘラミガキ　脚部ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区
2	土師器	高坏	19.6	－	<5.9>	ハケメ→暗文	ハケメ→口縁部ヨコナデ→暗文	完全実測	
3	土師器	高坏	15.3	－	<4.8>	放射状暗文	放射状暗文　坏下部ハケケズリ	完全実測	
4	土師器	高坏	－	16.3	<11.8>	坏部・脚部ハケメ	ヘラミガキ　脚部ナデ	完全実測　焼成前穿孔	Ⅱ区
5	土師器	高坏	－	13.6	<12.3>	ナデ	ヘラミガキ	完全実測	
6	土師器	小型丸底壺	6.20	－	<3.6>	ヘラナデ	ハケメ→ナデ	口縁実測	Ⅱ区
7	土師器	小型丸底壺	－	－	<8.0>	ナデ	ヘラナデ	口縁実測	Ⅰ・Ⅱ区
8	土師器	甕	(17.6)	－	<4.5>	ハケメ	ハケメ	口縁実測	Ⅰ区
9	土師器	甕	－	－	<13.2>	ヘラナデ	ヘラケズリ	口縁実測	Ⅰ・Ⅱ区

No.	素材	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
10	石器	磨・敲石	13.0	6.5	4.4	565.06	被熱なし、すり面2　両端面に敲打痕	Ⅰ区
11	石器	台石	35.4	32.1	9.2	15.50kg	被熱サ(一部黒化)　すり面1	

H13	種別	器種	法量			成形・調整・文様		測定値( )残存値< >入成●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	坏	－	－	<4.2>	ロクロナデ	ロクロナデ→底部周縁→回転ヘラケズリ	口縁実測	ホリカ

H14	種別	器種	法量			成形・調整・文様		測定値( )残存値< >入成●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	(13.2)	(14.6)	4.9	ナデ　煤痕　口縁ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ　底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁実測	Ⅰ区
2	土師器	坏	(15.6)	(11.6)	4.2	ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ　底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁実測	Ⅰ区　Ⅳ区ホリ
3	土師器	鉢	(11.5)	－	10.9	口縁部ヘラミガキ　体部ナデ	口縁部ヘラミガキ　底部ヘラナデ　体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	
4	土師器	小型甕	(11.1)	4.6	8.2	ヘラナデ	ナデ　底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区
5	土師器	甕	17.1	6.3	29.1	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	
6	土師器	甕	(16.2)	－	<23.3>	ヘラナデ	ヘラミガキ	口縁実測	Ⅰ区
7	土師器	壺	15.3	6.4	22.1	ナデ　口縁ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ	完全実測	
8	土師器	甕	－	6.0	<15.2>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	Ⅳ区
9	土師器	甕	－	6.9	<13.5>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	

No.	素材	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
10	石器	敲石	18.2	17.1	7.8	2.864kg	被熱あり(一部黒化)　正面に敲打痕	
11	石器	磨石	7.2	5.2	4.2	204.5	被熱なし、すり面1	Ⅱ区
12	石器	打石	0.70	0.70	0.50	0.42	孔径0.20　被熱なし	Ⅱ区ホリ

H15	種別	器種	法量			成形・調整・文様		測定値( )残存値< >入成●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	17.1	15.9	6.1	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ　底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	
2	土師器	甕	11.8	5.5	14.2	ヘラミガキ	頸部ハケメ　下部ヘラケズリ　ヘラミガキ	完全実測	
3	土師器	甕	(21.0)	8.4	26.2	ヘラミガキ　口縁部ハケメ	ヘラミガキ　体部上半ナデ→ヘラミガキ	完全実測	
4	土師器	甕	－	－	<22.3>	ヘラナデ	ヘラケズリ	口縁実測	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区
5	土師器	鉢	26.2	－	<24.6>	ヘラミガキ	ハケメ　ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区

H17	種別	器種	法量			成形・調整・文様		測定値( )残存値< >入成●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	皿	(13.0)	(6.2)	3.0	ロクロナデ　施釉(つけがけ)	ロクロナデ　施釉(つけがけ)　高台貼付	口縁実測	Ⅰ区
2	土師器	坏	(12.4)	(5.2)	3.0	煤痕	ロクロナデ	口縁実測	Ⅰ区
3	土師器	坏	(12.4)	－	<3.1>	黒色処理	ロクロナデ	口縁実測	Ⅰ区

第５表　出土遺物観察表（３）

(cm)　(g)

F1	素　材	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備考　　推定値( )残存値< >	出土位置
1	石器	竹石	(27.5)	17.5	7.9	(4.9)kg	被熱なし　一部欠損　すり面1　縁辺に敲打痕あり	P5
2	石器	竹石	(33.2)	(23.1)	(9.7)	(9.8)kg	被熱なし　上下欠損　すり面1	P3

F2	素　材	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備考　　推定値( )残存値< >	出土位置
1	石器	竹石	(24.2)	(15.9)	(7.2)	(4.4)kg	被熱なし　片側欠損　すり面1　縁辺に敲打痕あり	P7
2	石器	磨製石斧	(5.90)	(1.80)	(0.15)	(1.2)	礫岩20～0.35　被熱なし　基部欠損	P7

D1	種別	器種	法　量			成形・調整・文様		推定値( )残存値< >丸底●	
			C口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内　面	外　面	備　考	出土位置
1	須恵器	坏	(15.6)	(9.0)	4.2	ロクロナデ　丸だすき痕	ロクロナデ　底部～底部周縁ヘラケズリ　丸だすき痕	同転実測	
2	土師器	坏	(16.6)	(11.0)	6.2	口縁ヨコナデ　暗文	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	同転実測	

M1	種別	器種	法　量			成形・調整・文様		推定値( )残存値< >丸底●	
			C口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内　面	外　面	備　考	出土位置
1	須恵器	壺			(4.2)	ロクロナデ		同転実測	I区
2	須恵器	高坏	－	(11.4)	(16.1)	ロクロナデ　ヘラナデ	ロクロナデ　透かし孔跡所	同転実測	I・II区
3	須恵器	ブリヤン鉢	－	－	(14.4)	ロクロナデ	ロクロナデ　回転ヘラケズリ	同転実測	II区
4	土師器	坏	(13.0)	－	(4.8)	摩耗	ヘラケズリ	同転実測	II区
5	土師器	坏	(13.0)	(12.2)	4.6	口縁ヨコナデ　ヘラミガキ	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	同転実測	I区
6	土師器	坏	(12.9)	－	5.4	ヘラミガキ	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	完全実測	I区
7	土師器	坏	(13.2)	－	(5.6)	ヘラミガキ	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	同転実測	I・II区
8	土師器	高坏	－	－	(8.8)	ヘラミガキ　加飾　黒色処理	ヘラミガキ	完全実測	I区
9	土師器	高坏	－	－	(3.2)	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	I区
10	土師器	高坏	－	－	(6.4)	坏部～ヘラミガキ～黒色処理 脚部内面～ヘラナデ～黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	II区
11	土師器	小型壺	(11.6)	－	(5.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	同転実測	I区
12	土師器	小型壺	(7.0)	－	(3.4)	ヘラナデ	ヘラケズリ	同転実測	I区
13	土師器	小型壺	(10.0)	－	(4.4)	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	ナデ	同転実測	II区
14	土師器	小型壺	－	－	(8.6)	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ　ハケ目	同転実測	I・II区
15	土師器	小型壺	－	(6.0)	(4.0)	ヘラナデ	ヘラケズリ	同転実測	II区
16	土師器	甕	(15.0)	9.6	17.2	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ	同転実測	I・II区
17	土師器	甕	(20.2)	－	(7.2)	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ　摩耗	同転実測	I区　ケン
18	土師器	甕	(26.6)	－	(5.6)	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ	同転実測	I区
19	土師器	甕	(23.2)	－	(12.0)	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	同転実測	I区
20	土師器	甕	24.0	(9.0)	(32.8)	口縁ヨコナデ　ヘラナデ　ハケ目の残るナデ	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	完全実測	I区
21	弥生	甕	(29.8)	－	(20.9)	ヘラミガキ	櫛描波状文　ヘラミガキ	同転実測	I区

No.	素　材	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備考	出土位置
22	石器	打製石斧	(9.8)	(6.1)	(1.7)	(134.1)	被熱なし　基部欠損　摩滅痕あり	II区
23	石器	打製石斧	(12.8)	(12.0)	(2.9)	(356.0)	被熱なし　基部欠損	I区
24	石器	磨石	10.8	6.5	4.2	447.5	被熱なし　全体にすり	I区
25	石器	管玉	0.55	0.55	1.60	1.37	孔径0.16　被熱なし	I区
26	鉄製品	鏃	(17.3)	2.5	2.0	(15.4)	刃部欠損	

単P	種別	器種	法　量			成形・調整・文様		推定値( )残存値< >丸底●	
			C口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内　面	外　面	備　考	出土位置
1	土師器	坏	(14.2)	－	(9.7)	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ　ハケ目	同転実測	P38

Gr	種別	器種	法　量			成形・調整・文様		推定値( )残存値< >丸底●	
			C口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内　面	外　面	備　考	出土位置
1	須恵器	有台坏	(9.6)	(7.4)	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ　高台貼付	同転実測	ケン

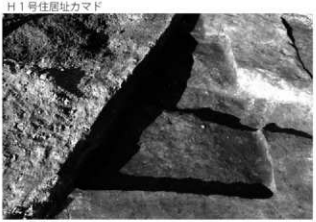
No.	素　材	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備考	出土位置
2	石器	磨石	(12.7)	(7.6)	(6.4)	(261.0)	被熱なし　上部欠損　縁部に敲打痕	GrGr

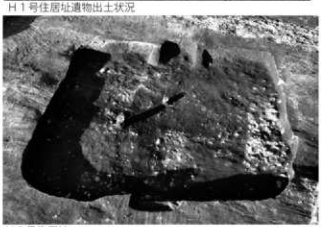
第 29 図　市道遺跡・Ⅱ次・Ⅵ次調査全体図

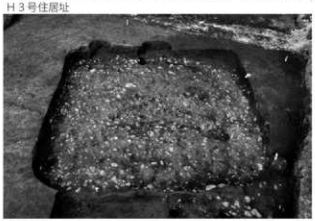
Ｈ１号住居址

Ｈ１号住居址カマド

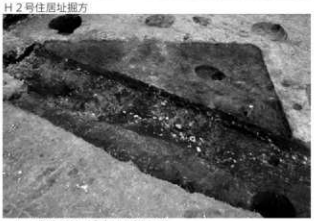
Ｈ１号住居址遺物出土状況


Ｈ３号住居址


Ｈ２号住居址


Ｈ２号住居址掘方

Ｈ４号住居址（令和元年調査分）


Ｈ４号住居址（令和２年調査分）

図版　2

H５号住居址

H５号住居址カマド

H６号住居址

H７号住居址

H８号住居址

H９号住居址

H10 号住居址

H12 号住居址

H 11 号住居址

H 11 号住居址炉

H 11 号住居址遺物出土状況

H 13 号住居址

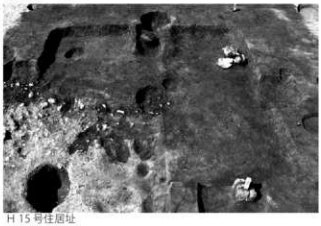
H 14 号住居址

H 14 号住居址掘方

H 14 号住居址遺物出土状況

H16 号住居址

図版　4

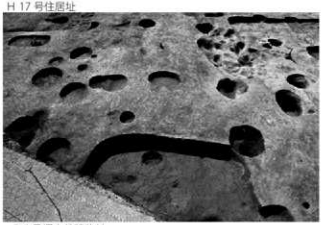

H 15 号住居址

H 15 号住居址カマド

H 15 号住居址遺物出土状況

H 17 号住居址

F1 号掘立柱建物址

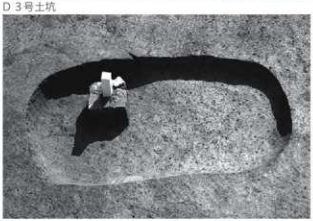

F 2 号掘立柱建物址

D1 号土坑

D 2 号土坑

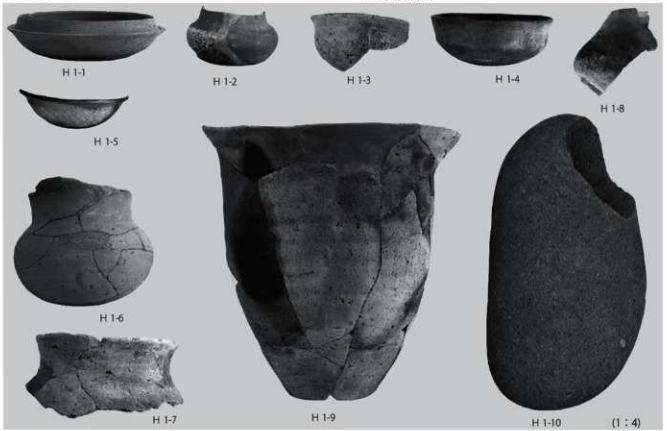
D 3 号土坑

D 4 号土坑

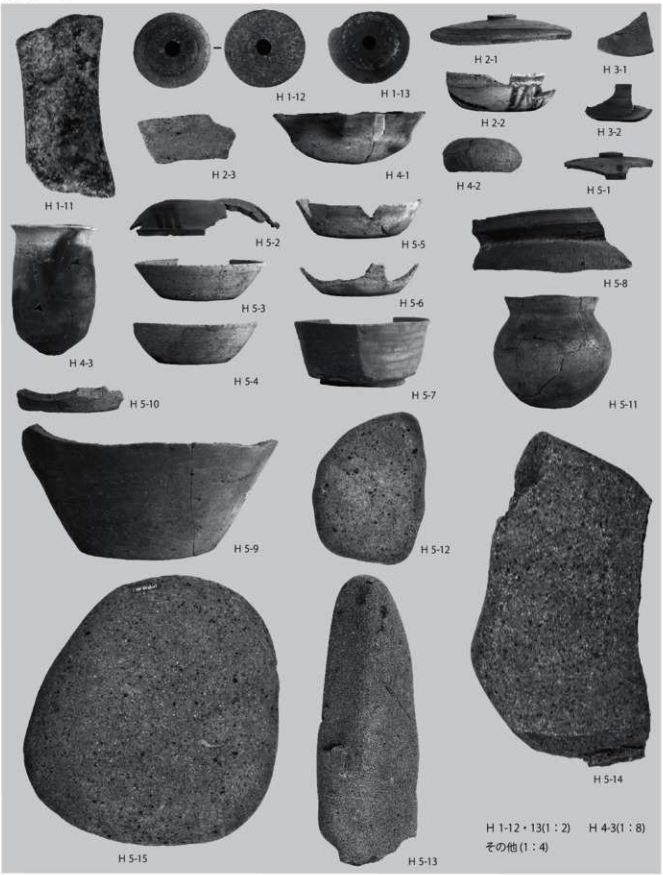


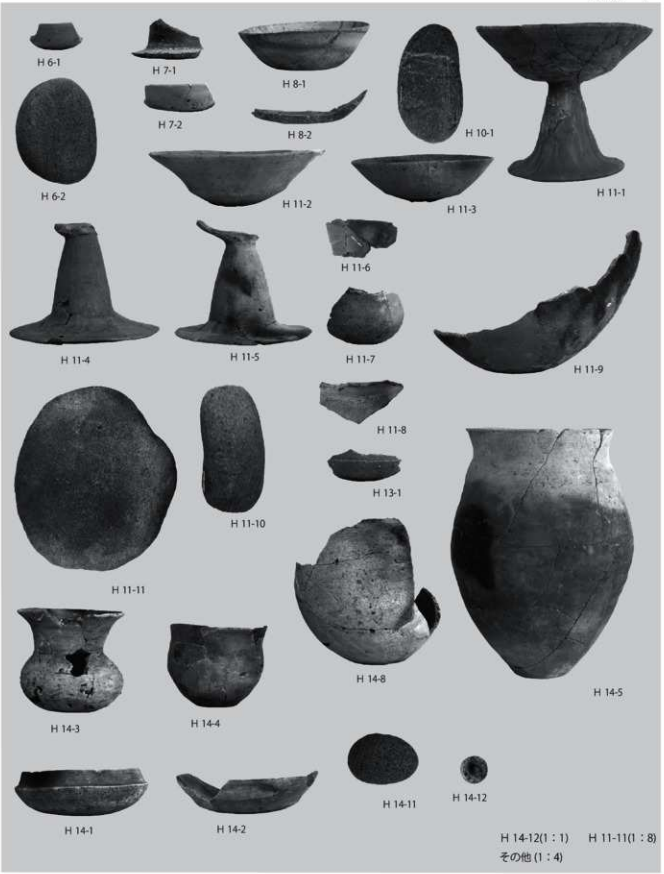
D5 号土坑

M 1 号溝状遺構



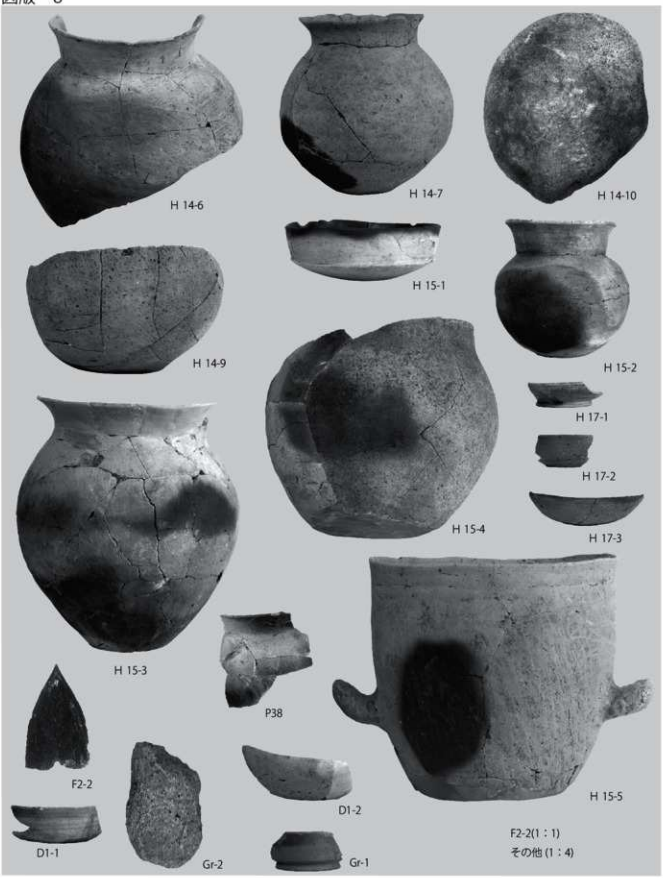
図版　6

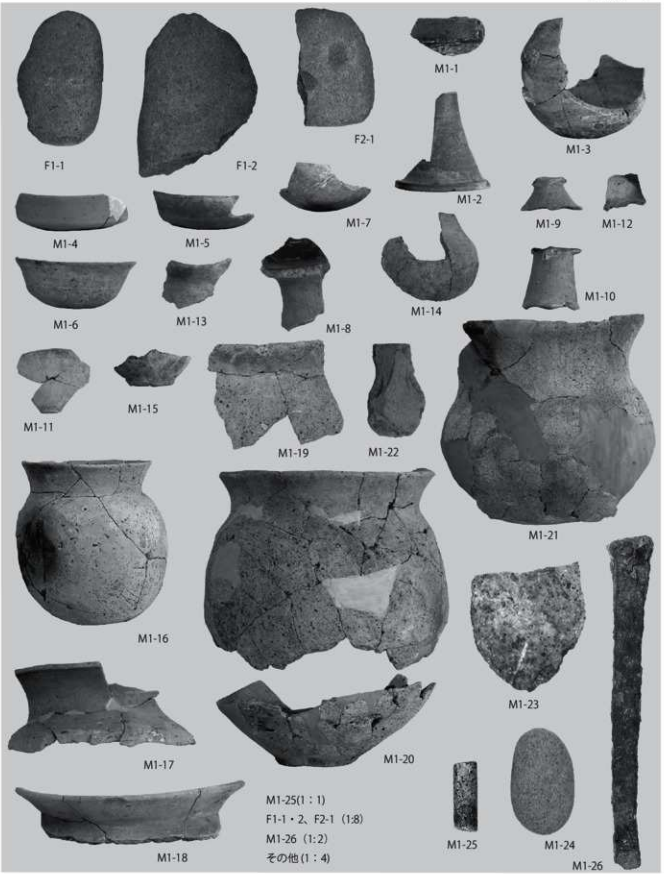

H 1-11
H 1-12
H 1-13
H 2-1
H 3-1
H 2-2
H 3-2
H 2-3
H 4-1
H 4-2
H 5-1
H 5-2
H 5-5
H 5-8
H 5-3
H 5-6
H 4-3
H 5-4
H 5-7
H 5-11
H 5-10
H 5-9
H 5-12
H 5-14
H 5-15
H 5-13
H 1-12・13(1：2)　H 4-3(1：8)
その他(1：4)



H 14-12(1：1)　H 11-11(1：8)
その他 (1：4)

図版　8


H 14-6
H 14-7
H 14-10
H 15-1
H 14-9
H 15-2
H 17-1
H 17-2
H 15-4
H 17-3
H 15-3
P38
H 15-5
F2-2
D1-2
D1-1
Gr-2
Gr-1
F2-2(1：1)
その他 (1：4)


F1-1
F1-2
F2-1
M1-1
M1-3
M1-2
M1-7
M1-9
M1-12
M1-4
M1-5
M1-6
M1-13
M1-8
M1-14
M1-10
M1-11
M1-15
M1-19
M1-22
M1-21
M1-16
M1-23
M1-17
M1-20
M1-18
M1-25(1：1)
F1-1・2、F2-1（1:8）
M1-26（1:2）
その他(1：4)
M1-25
M1-24
M1-26

報告書抄録

ふりがな	みちづかいせきぐん いちみちいせきろく
書　名	三千東遺跡群　市道遺跡Ⅵ
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第278集
編著者名	冨沢　一明
編集機関	佐久市教育委員会　社会教育部　文化振興課
所 在 地	長野県佐久市中込2913　TEL0267-63-5321　FAX0267-63-5322
発行年月日	2021年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
みちづかいせきぐん いちみちいせきろく 三千東遺跡群 市道遺跡Ⅵ	さくしみちづか 佐久市三塚 127-1、127-2	20217	417	36°13.52	138°27.21	20191202 ～ 20200423	560	ホテル建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三千東遺跡群 市道遺跡Ⅵ	集落址	古墳 奈良 平安	住居址　17軒 土　坑　6基 掘立柱建物址 2棟 溝状遺構　1本	弥生土器 土師器 須恵器 石製品 鉄製品	

要　約	沖積地内の微高地に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に古墳時代から奈良・平安時代と考えられる住居跡が検出された。また、検出された住居の中には、佐久地域では希少な5世紀前半代と考えられる住居が含まれていた。出土遺物としては6世紀代の住居内より、変形の三角文を刻んだ石製紡錘車が出土した。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第278集
三千東遺跡群　市道遺跡Ⅵ
2021年　3月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
社会教育部　文化振興課　文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込2913
℡0267-63-5321
印刷所　キクハラインク有限会社